



お茶作りでは毎年一年生
その年の葉に教わります
一つ一つが新しい発見です



HITO

諸口直昭さん (狭山市茶業協会会長)

狭山茶とともに50余年。現在、狭山茶業協会の会長である諸口直昭さんは、その歩んできた道に胸を張ります。

諸口さんが、明治初期から続く家業の茶園を継いだのは、昭和20年代の半ば、学校を卒業して間もなくのことでした。子どもの頃からお茶に親しんで育ち、茶摘みやお茶作りの面白さが分かっていたので、家業を継ぐことは当然のことだったそうです。当時、茶摘みはすべて手摘みで、収穫時期になると川越の大東村から50人もの摘み手がやって来たと言います。そんな時代に、諸口さんは茶摘みの機械化にもいち早く取り組み、当時2・5haあった茶畑の収穫の能率は飛躍的に向上したそうです。同時に品種



改良にも熱心に取り組み、他産地を視察しては他の産地に負けないように、味の良い品種を考へ、在来種から「やぶきた」に変えていきました。製茶の工程にもこだわりを持ち、甘みがあつて香り高いお茶を常に目指しているそうです。

さらに、諸口さんは「何と言つても農作物は、土が命だから」と、これまでも良い土を作ることに力を注ぎ、有機栽培にこだわつてきました。良い土、力のある土は虫を寄せつけず味もまろやかにするそうです。「これもすべて、安心して飲めるおいしいお茶のため。思い通りのお茶ができる、飲んだときのお客さんの笑顔が浮かびます。」と嬉しそうに語ってくださいました。

茶業協会の会長として狭山茶のこれからを伺つと「狭山茶は日本一おいしいお茶だと自信を持っています。年々茶畑が減少していますが、多くの後継者が育つており、安心していきます。今年の11月に全国茶品評会が入間市の県立茶業試験場で開催されるので、協会の研究部では技術を集約し、その成果を発揮しよう」と取り組んでいます。「5月にはあちこちで新茶が香ります。日本一おいしいお茶の産地に住んでいることを実感して欲しいですね」と目を輝かせて語ってくださいました。

狭山の生態系

イスカ

(スズメ目アトリ科)

全長約17cm。雄は全体に赤色、雌は灰緑黄色のこの鳥は、嘴は太く、先端は鋭く曲がり、上下が食い違っているのが特徴です。これは秋冬にマツなどの堅果をその特殊な形の嘴でこじ開けて種子を食べるためだと言われています。日本では主に冬鳥として北海道・本州などに渡来しますが、年によって渡来数に差があり、最近では平成3年と10年に多く記録されています。また、本州北部および中西部での繁殖も記録されています。市内では、水野や赤坂の森で観察されています。



撮影：県生態系保護協会狭山支部
矢内昭夫さん（水野）